

努力してもよい方向に変化がみられないため、意欲を失うのが無力感である。この、「獲得された無力感」に関する実験的研究を行ったセーリックマンは、回避できない苦痛刺激の連続が、意欲や学習能力の低下をもたらし、情緒の混乱さえも引き起こすことにつながることを示した。一方、ルウィスが乳児に行った実験は、泣けば抱いたりあやしたりと母親の手が差し伸べられることにより、自分が環境に対して影響を及ぼすことができるという自信となり、新しい事に対し意欲的になるだけでなく、将来、失敗を経験しても、打ち負かされる事が少なくなるという結果を得た。つまり、物理的環境からの応答的経験を通じて効力感が形成され、自分の能力を積極的に使い知力の発達をも促進するというのだ。一方、失敗が無気感を生むのだが、失敗それ自体よりも、その原因を「能力」「努力」どちらに置くかにより、後の行動の仕方や意欲が変わってくると指摘する。また、自分の能力や適正や興味を正確に知っておくことが重要で、自分にとって「やりがい」のある課題を選び、そこで努力の有効性を確認してはじめて本当の自信が得られる。失敗に対して、どのように努力するか具体的な改善策を思い出すことが必要であると著者は述べている。

ここで、筆者は3つの考察を加える。1つ目に乳幼児期の応答的体験の重要性について、2つ目にメタ認知について、3つ目に成功・失敗の能力について、

はじめに、乳幼児の無力感・効力感については、確かにその時期の応答的体験は効力感となり、望ましい発達の要因となるであろう。ただし、それが後の人生全てを左右するほどの重要事項となりえるかと言われると、疑問が残る。乳幼児以降の学齢期における体験も十分に人生に影響を与えると考えられる。成長過程での人との出会いや、回りの環境が影響を及ぼすであろうし、教育の成果が人間形成に発揮されてしかるべきであろう。

次に、メタ認知について、自分はどのような能力あり、どういったことに適しているかなどを自分で把握することはとても大事なことはあるが、それによって行動が抑制されるようなことは避けなければならないと思う。失敗経験を活かして成長することの大切さを、体験を通して子どもたちに教えていくのが望ましいと思う。人間は、自分の無力さを認識したとき、以前にもまして無気力になり、挑戦することから脱退する傾向にあるが、辛抱強く励ましを与え見守ることで、子どもの自信となり前向きな行動につながってくると思う。

最後に、失敗を自分の能力不足とみなすか努力不足とみなすかにより、課題への挑戦意欲に大きな差があると言う説が実証されている。やればできる、つまり「もう少し頑張ればできるようになるから、あきらめないで頑張ってみよう。」と言う声かけを、教師は様々な場面において子どもに投げかけている。往々にして、成功に導くのは努力であり、決して能力が無いなどとは言わない。ここで、著者は努力万能主義を批判している。確かに、行き過ぎた「やればできる。失敗したのは、努力が足りないからだ。」などと追い込み、到達できないこと全てを努力不足のせいにするのは間違っているし、一転「そこまで努力してもだめなのなら、やはり能力が無いのだろう。」などと言われれば、誰しも落ち込むのは当然だ。学校の教育において一番必要なのは、教師が子どもの状態をよく理解することであり、本人の努力が足りないのなら、「もっと頑張れ。きっとできる。」の言葉かけも有効であろう。

人間は、自分の無力さを認識したとき、以前にもまして無気力になり、挑戦することから脱退する傾向にあるが、辛抱強く励ましを与え見守ることで、子どもの自身となり前向きな行動につながってくると思う。